

刺青は「彫れる」か

—近代転換期における裸体芸術と日本的身体観の特殊性を中心に

平井倫行 (相州真鶴 貴船神社)

本発表は、我国で独自の発展を遂げた芸術である「刺青」の美学的位置づけを考察するものである。近世から近代にかけ成立した「刺青」とは、読んで字の如く「青(墨)」を「刺す」事、皮膚を傷つけ、そこに線ないし色を残す「行為」を示し、「皮膚に描かれる絵画」としばしば表現される。それは多くの場合に絵画形式をとり、身体全体、あるいは皮膚の広域な面積を覆う、日本刺青の特徴に拠っている。

他方、「刺青」は一般に「彫る」ものとして、「刺青を彫る」の如く動詞化され、名詞的には「彫物」と呼称されるように、感覚上「描く」ではなく「彫る」と捉えられている。絵画的に表現される刺青に対し、少なくとも視覚的に「彫刻」としての性質は認識出来ないが、それでいながらこの「刺青を彫る」という感覚は、文化形成の初期から現在に至るまで広汎に支持、共有されてきた。そこには誓願の為の「起請彫」を淵源とする刺青が、その技法確立の過程で浮世絵や工芸、特に「木版」「木彫」から受けた「彫刻性」「彫琢としての創作」という意識の、色濃い反映を仮定する事が出来る。

しかし、これら刺青に関する「彫る」に類した表現は、必ずしも現実に即した把握ではない。それは刺青を「彫る」為には伝統的に「針」が用いられるが、元来「針」とは「布」を「縫う」ものでこそあれ、決して何かを「彫る」為の道具ではないからである。

刺青は「身体」を場、ないし地として「絵画的」に表現されつつ、しかし「描くもの」とはされない。技法として彫刻刀などを用い、実際に身体を「彫る」訳ではないが、しかし優れて「彫るもの」と認識される。身体芸術としての刺青における「絵画的性」と「彫刻性」というこの本質的差異は、「布」を「縫う」用具としての「針」によって止揚されており、刺青の有す「衣裳性」にこそ、その調停の契機は求められるのではないか。刺青を表す語の一つである「刺繡」は、特にこの構造を明瞭に表している。

刺青は専門研究、あるいは、一般的な感覚に及ぶまで「皮膚に着せた衣裳」として把握、表現される傾向を有すが、この意識の根底には、ヌードに象徴される西洋の身体に対する美意識と比較される、「美を衣裳性に見出し、具体的身体を眼差さない」日本人の特殊な身体観という、極めて重要な主題が潜在している。

本発表はこうした刺青の概念的不安定さを指摘しつつ、その整序を試みるものであり、近世から明治期の資料に確認される刺青の用語・用法、また裸体を表現した彫刻や絵画と刺青との境域に存在する問題を、特に衣裳との関係を基軸として考察する。刺青を「彫る」という表現の意味を、改めて「字義に即した」視座から論じる事は、今後の刺青研究において、その論点を明瞭なものとする意味からも、意義を有していよう。

刺青は裸体そのものに美的価値を見出さず、身体を覆う衣裳にその価値を置く我国の身体観念の延長に属した、特異な芸術形式なのである。